

第一章 災害史

角谷久五郎著「高知県災害異誌」

須崎小学校編「郷土須崎」吉川家蔵「山崎久助年代記」

高知地方気象台の資料、須崎消防署その他による。

※印別項で詳述した。

六八四 天武帝、白鳳二二、一〇、一四

※ 南海道沖大震。M八・四（MⅡマグネチュード）

一一〇〇 康和 二・一^{注1}「勘仲記紙背文書」に次の記録がある。

「土佐国潮江庄、康和二年正月□四日地震之刻国内作田千余町皆以成海底畢、社領潮江御庄依近海浜、又以同前」（下村效氏教示、東洋文庫蔵）

一三六一 正平一六、六、二四、南海道沖大震 M八・四 番美郡田村正興寺に高潮

一六〇五 慶長九、一二、一六 地震 M七・九

土佐東郡に津浪、佐喜浜へ十丈もある大波七度、さらわれた男女五十四人。

一六五八 万治一、八、一九 風雨、幡多方面被害大。

一六六六 寛文六、七、四 風水害。

被害面積、五六六〇町歩、米、四万石、

第1節 災害史

- 一六六七 同 七、
西部地方風雨。
- 一六七八 延宝六、二、二四 須崎火災 二四戸焼失
- 一六八二 天和二、
大饑饉
- 一六八五 貞享一、一二、一四、須崎火災 五〇戸焼失
- 一六七八 同 四、九、八 大風大□須崎浦へ上る、在方へも少々入。
- 一六九九 元禄二、二、一二、
高潮、汐木、押岡は行光の前迄入、汐留堤切れる。
- 一七〇三 同 一六、
凶作
- 一七〇四 宝永一、七、一
風水害。御家年代記によると、損毛地高八万石。

- 一七〇七 宝永四、一〇、四 地震(亥の大変) M・八・四
- 一七一〇 同 七、二、一九 押岡山火事、山焼の際、大風となり大火に及び御留山数ヶ所焼失する。
- 同 四月中旬 大雨大水、堤数ヶ所切れる。寄夫用飯米二〇石。
- 一七一一 正徳三年四月中旬、長雨のため、麦不稔、在所中(押岡)残らず、わらびを掘る。
- 同 五月から六月にかけて早天。
- 一七一四 同 四年五月二十九日から七月九日まで早天。
- 一七一六 享保一年一〇月 須崎浦、土降る。

- 一七二〇 享保五年 土崎、神田、飛田汐留切れる。
- 一七二二、同 七、一二、一二 野見浦大火事、残る家なし。
- 一七二六 同 一一、七、五 悪風吹き、早稲傷む。
- 同 九、二二、二三 風水害、吾井郷堤、数ヶ所切れ、土崎汐止堤切れる、修理の寄夫、押岡へ二九一人役。

一七二九 同 一四、九、一四 大暴風雨、

民家を破り、流木、諸作損害甚大、多ノ郷より押岡迄の汐止堤切れる。

須崎御大師尊像、堂とも流失、地蔵も流失。神田、吾井郷、新莊川筋堤破壊。

一七三二 同 一七年、
長雨、うんか発生、飢人多数。

一七三七 元文二、一一、二 須崎浦大火事、一四〇戸焼失、

一七四一 寛保一、一一、一八 六ツ時太兵衛方より出火、類焼三〇軒、

御公儀様より御恵米老軒に一斗五升宛拝領。

一七四五 延享一、一二、六 古市御分一処(現在警察署附近)弥五八方より出火、浜町の大部を焼き庄屋役所
附近まで、一九七軒。

一七五四 宝暦四、一、九 中町加賀屋から出火七百余戸。(古市町全体)

同 四、二七 大洪水、岡本井関切れる。

同 五、二 七ツ時、汐くるとい池田の井流いたむ。多ノ郷、土崎・押岡の汐田堤破損植田残ら

一七五七 同 五、七 浜町火事 三〇軒焼失。
 一七五七 同 七、七、二六 風水害、高汐

八ツ時より大時化、大浪、五十年來のこと。大木倒れ、浦々大浪に而大きないたみ、須崎浜、今在家とも家屋大破損。在所中の本家、納家、三十軒余倒れ、氏宮の木、残らず倒れる。稲田すべて鎌入出来ない大損毛。
 「御家年代略記」に風雨浦々に激浪襲来し、損害多し」とあり。

一七五八 宝曆八、三、四 古市町長三郎方より庄屋の門前まで十四戸焼失。

一七六三 同 一三、一一、一二 須崎大火 四六戸

一七七四 安永 三、一、一三 同 一九八戸(茂衛門火事)

一七七八 同 七、 六月〜七月 長雨

一七七九 同 八、 七月〜八月 大雨

一七八二 天明 二、 風水害

一七八八 同 八、 大雨 (全国的大飢饉)

一七九二 寛政 四、七、二六 風雨流失家屋二〇一戸

「御家年代略記」によると六二〇〇戸破損、八一人死亡。

同 一一、二〇 須崎大火 二〇一戸、

糺町谷吉屋文兵衛方より出火し、古市町吉崎屋伊兵衛方へ飛火、古市・浜・新

町から高須までに及ぶ。八幡宮も焼失。

一七九八 同 一〇、 五月から八月まで九十日間大千魃稲作皆無に近い。

一八〇四、文化 一、七、二六 領内暴風雨、高岡・幡多二郡被害大。

一八一五、同 一一、七、六〜八 風水害

「御家年代略記」によると、国内の死者八三、流失家屋一八一、損毛数万石。

一八二二 文政五、六、三〜四、大雨洪水、特に西部激しい。

一八二五 同 八 須崎出火 (下元文書)

一八二六 同 九、二、二〇 中町富山屋藤右衛門方出火、横町へ延焼三二軒。この火災に金目石という相撲取、梯子へ人を乗せ屋根毎にさし上げ衆人その大力に驚いたと。

一八三〇 天保一、一一、二六 古市町紺屋団次方出火五軒。

一八三三 同 四年〜七年 全国的に風水害。

一八五四 安政一、一一、五 地震(寅の大変) M八・四

同 一一、二五 風雨

一八五七 同 四、七、二九 真覚寺日記並大変略記によると、七ツ半時より暮合まで大風雨、波荒れ、汐甚だ高く、大変以来の大汐なり。

一八五八 同 五、七、一四 洪水、

第1節 災害史

同五年～六年 各地でコレラ（トンコロリ）流行。
 一八六〇 万延一、四、五～七 風雨
 一八六一、文久一、五月～七月 干魃、但し豊作。
 一八六二 同 二、六月～七月 はしか大流行。
 一八六三 同 三、二、八～九 大洪水
 一八六六 慶応二、 夏冷温、秋水害、凶作
 同 六、二八～七、一、大風雨

長谷川文書「此時の洪水無類也。先年寅の大変の時に一分もかわらず、池田より中町筋の御普請場迄一円の水なり。下分は門谷、長竹、岡本一円池の如くなり。」

一八六八 同 四、六、二七～二九 高汐のため、土崎、押岡の汐切堤大破損、稲いたむ、凡そ千俵と推定。
 一八七九 明治二、 コレラ流行。

一八八一 同 一四、一、一二 浜町川崎莊吉方より火災（五軒）

一八八三 同 一六、六、三 古市町米屋尾崎丑之助方より火災、一六軒。

一八八六 同 一九、一、一二 西町中平・吉田方より、火災一軒、大師堂の榎並焼ける。

同 一、三二 浜町橋詰久次郎方より火災（五軒）

同 九、一〇 台風七二〇ミリ以下

佐川・斗賀野方面の被害が特に激しかった。中心の通路は図の通り。

同 一一、一六 西町高野今平方より出火廿三戸焼失

一八八七 同 二〇、二、四 浜町前田弥次右衛門方より出火し、一二戸焼失。

同 二、一〇 古市町長原清太郎方より出火一戸焼失。

同 三、一五 横町租税検査員派出所（税務署）全焼、

一八九〇 同 二三、九、一一 台風七五〇ミリ。雨台風といわれる程で、特に新莊川の氾濫甚し中心の通路は図の通り。

なほこの年は八月二一日、九月一七日、同じ二四日にも暴風雨があり、農作はその被害多く半作以下であった。

一八九二 同 二五、七、二三 台風七三〇ミリ以下

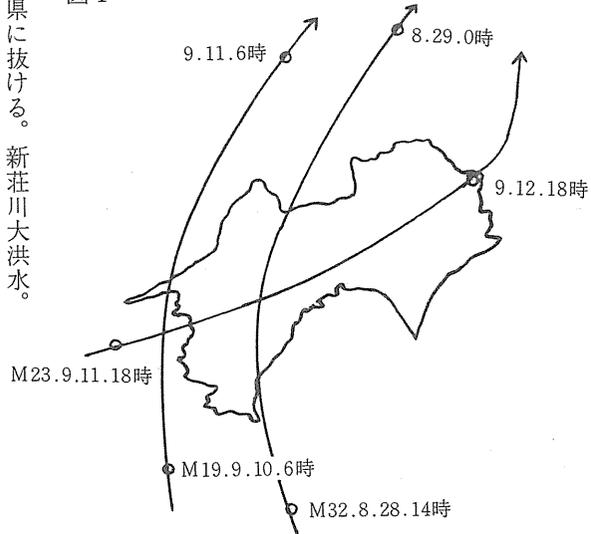
中心は六時高知市付近に上陸し、北西進して島根県に抜ける。新莊川大洪水。高知市の雨量、四日間に四二四mm

一八九三 同 二六、 夏五十日間雨なく大干魃

一八九四 同 二七、 夏、大干魃

一八九五 同 二八、七、一五 糺町須崎税務署長（安岡良純）方より出火

図1



第1節 災害史

同 二八、八、二三 台風（七三〇^ミ）の中心は、須崎付近通過、北上して松江へ抜ける。
 一八九七 同 三〇、九、二八 台風（七三三^ミ）熊本から、四国北部を東進した。須崎で死者一、全壊一、半壊一の外は被害不詳。

一八九八 同 三二、九、二一 台風中心が九州南部から四国を斜断したので雨量多く、須崎の雨量は、四日間に六三一mmに達したが被害状況不詳。

一八九九 同 三二、七、八 台風（七一五^ミ）四国の西を通過、七日〜九日の三日間の須崎の雨量は四〇〇〜六〇〇mm

同 八、二八 七二〇^ミの強い台風で幡多郡下田付近に上陸し、岡山方面へ抜けた。高知城天守のシヤチや測候所の風力計が飛ぶほどの激しいもので須崎小学校一部倒壊、上分村の記録では、倒壊家屋一七、半壊九、小学校を含めて大破一八とある。桜川も氾濫する。

同 九、二一 台風中心が九州西岸を北上、速度が遅く大雨を降らし、須崎で二〇〇mm上分では三〇〇mm以上、三九戸が床上浸水。

一九〇〇 同 三三、五、三 浜町藤崎繁太郎方より出火（六戸）

一九〇一 同 三四、一二、二一 浜町橋詰石太郎方より出火（七戸）

一九〇二 同 三五、九、七 台風による高汐で、久礼では一〇〇〇が避難した。

一九〇八 同 四一、四、一九 浜町中村音衛方より出火（九〇戸）

同 五、一一 高岡郡役所焼失

同 八、一〇 雷雨のため須崎の雨量四〇〇mm

一九〇九 同 四二、一一、一〇 日向灘地震 M七・九
 須崎地方はほとんど被害なし。

一九一一 同 四四、八、一五 台風と洪水、須崎の雨量二〇〇〜三〇〇mm

一九一二 同 四五、五、七 横町、得月楼支店焼失

大正 一、九、二二 台風、須崎の雨量四〇〇〜五〇〇mm

同 九、二五 小浦、岩本真文方焼失。

一九一四 同 三、一、一二 櫻島噴火による地震と降灰、火山灰のため当地でも木の葉が白くなった。

一九一八 同 七、七、二二 台風七二〇^ミ、豊後水道を北上、八日〜一二日、須崎の雨量二〇〇〜四〇〇mm
 高汐の害もあった。この年スペイン風邪流行。

一九二〇 同 九、七、二四 台風中心が七時頃須崎付近に上陸し松江方面へ、須崎の雨量二〇〇mm以上。

同 八、一五 台風、被害は幡多に多く、八月中、須崎の降雨は七〇〇〜一〇〇〇mm

一九二二 同 一一、七月は多雨、八三二mmで平年の二・四倍。八月は僅かに七八mmで早魃。

一九二五 同 一四、九、一七 台風中心、瀬戸内を通過し県東部に雨が多かった。

一九二八 昭和三、八、一八日と二九日 台風、

同 三、一〇 錦館火災

一九三一 同 六、一一、八 古屋小路、一五戸全半焼、

一九三四 同 九、九、二二 室戸台風、近世の大台風で中心示度六八四^ミ、中心通路が南東に偏したので、比較的被害は少なかった。高岡郡下の損害は次の通り、

死傷者 三、全壊 二二、半壊二五、
 流失一五、床上浸水一三六、床下浸水
 一八八、船の損傷三八八隻。
 一九三五 昭和一〇、八、二八 中心示度七三〇^ミ
 須崎の雨量、二〇〇〜四〇〇mm
 被害 全壊一、半壊二五、流失一、
 浸水三〇、海岸道路数ヶ所決壊。

一九三七 同 一一、九、一〇 中心示度七一〇^ミの台
 風通路は昭和一〇年八月の台風と略同じ。
 強風の時間が短く、被害も少なかった。
 龍巻が須崎から戸波へ走った記録がある。

同 一二、一二 吉村旅館火災、
 一九四三 同 一八、七、二四 豊後水道を北上した弱

い台風（九九二^ミ）であったが、雨が多く四日間に当地では、五〇〇〜八〇〇mm。
 一九四五 同 二〇、九、一七 枕崎台風
 同 一〇、一〇 阿久根台風

共に南九州から大分県を経て、広島方面を通った。特に前者は猛烈で、県下の被害は死者一七、全壊五三四、流失七三其の他。

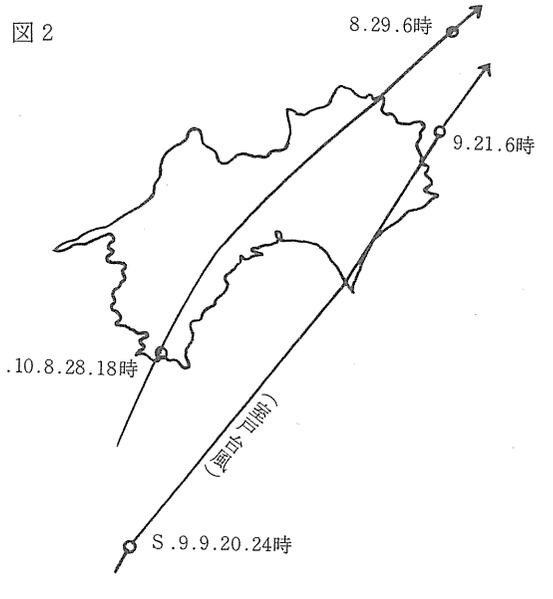


図 2

一九四六 同 二一、七、二九 中級台風、各地に洪水、須崎の雨量三〇〇mm
 同 一二、二一 北海道沖大地震 M八・一
 一九四七 同 二二、九、一一 古市町火災、住宅倉庫六全半焼
 同 七、二九 須崎工業学校 本館第二棟外 四五〇坪焼失
 一九四七 同 二三、一一、二 西浜ノ火災、網納屋一六棟、工場一棟。
 一九四八 同 二三、一一、二六 高陵燃料工業所火災
 一九五一 同 二六、四、一〇 須崎木材会社火災
 一九五一 同 二六、七、一一 台風六号（ケイト）九七六〜九八七^ミ 一日二三時、宿毛清水間に上陸、須崎
 沖から安芸を経て大阪方面へ、降雨多く引き続いて梅雨前線による豪雨が
 った。

同 七月二十日から八月中旬まで干魃。
 同 一〇、一四 台風一五号（ルース）九二七^ミ 風雨が強く相当の被害があった。
 一九五三 同 二八、六、七 台風二号。
 同 九、二六 台風一三号雨と風浪が強かった。
 一九五四 同 二九、六、七月 梅雨顕著
 同 八、一七 台風五号（グレイス）中型台風（九七四^ミ）須崎付近の雨量は二〇〇mm。
 六月上旬から七月中、雨天日数夫々二十日を越え、特に六月二十九日は大雨とな
 り、須崎では二三〇mm以上。

第1節 災害史

同 九、二六 台風一五号*

洞爺丸台風の名あり、日本各地に被害あり。

一九五五 同 三〇、七、一六 台風一六号 共に雨が

同 一〇、三、四 台風二三号 多かった。

一九五六 同 三一、九、二五、二六 台風一五号、

九六〇^ミ、土佐沖を北東進、須崎の雨量三

〇〇mm

同 十一月から翌三月まで六四日間雨なく

電力事情は悪化し、井水はかれ、農作物の

被害も多く、神武以来の水不足”といわれ

た。

一九五七 同 三二、二、二六 南原町堀川通、六棟全

焼、

同 四、一 上分小中学校全焼

一九五七 同 三二、九、八 台風一〇号 九九二^ミ

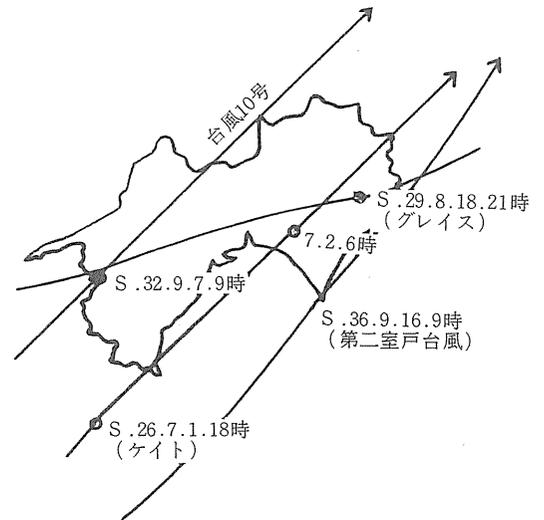
宮崎付近から四国西北部を北東に通過し、県西南部は暴風雨となり、新莊川氾濫し、上分首永の堤

防一三〇m決壊。

一九五八 同 三三、一〇、一八 低気圧による大雨、須崎の雨量二〇八mm

同 一二月から翌三月まで、例年より二度、四度も高く、暖冬異変となった。

図3



一九五九 同 三四、八、八 台風六号 九七〇^ミリ

足摺から安芸市付近を東北へ、東津野方面の雨量六〇〇mm、須崎付近の損害は軽微。

同 九、二六、台風一五号(伊勢湾台風) 九三〇^ミ、伊勢湾を中心として中央日本に甚大な害を

与えたが、本県は東部海岸に大波が打寄せ被害があった外はその影響は僅少であった。

一九六〇 同 三五、二、一 丸共製材・藤尾木炭倉庫等火災。

同 五、二四 チリ[※]地震津浪、

同 八、二九 台風一六号、九七〇^ミ中心が宇佐付近へ上陸、同港では平常より水位が二m高く

なり、堤防が決壊した。

一九六一 同 三六、九、一六 第二室戸台風(一八号) 九二五^ミ、午前九時半、室戸岬に上陸し海岸沿いに北

東進した最大級の台風。本県では十四日昼前から雨が降り出し、次第に強くなった。風も十六日早

朝から二〇m以上の暴風雨となったが、大型台風の割合に被害は少なかった。須崎付近の雨量は二

三〇〇mm。

一九六三 同 三八、六、一三 台風三号、九九六^ミ、小型台風で宿毛付近から北東進した。

同 八、九 台風九号九六五^ミ、

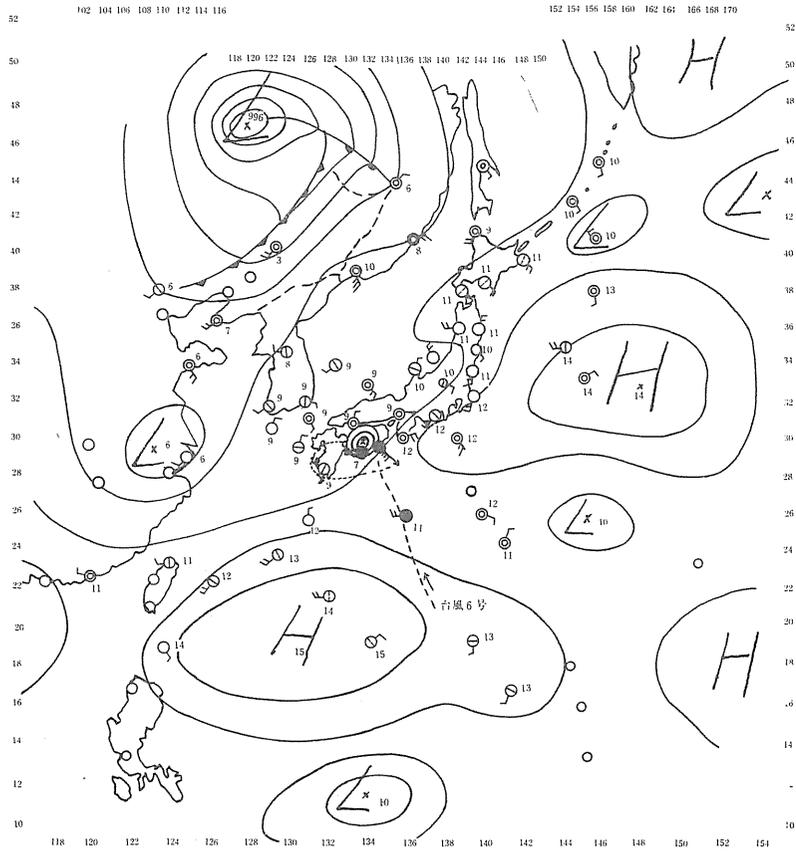
一九六四 同 三九、九、二五 台風二〇号九三〇^ミ、

同 四〇、三、一五 隣保館火災。

同 九、一〇 台風二三号九四五^ミ、

午前八時半安芸市付近に上陸し北東進した。進行速度が速かったため、全般に雨量は少なかったが、

図6 天気図 1973 昭和48年7月26日12時



台風6号のくずれによる豪雨
須崎における雨量、393ミリ

九、一九 須崎チップ工場火災

一九七二 同 四七、六、七 集中豪雨 三〇〇mm

梅雨前線がゆっくり北上し、強雨域が土佐湾沿岸にせまり、七日午前から昼過ぎにかけて西部で多く、午後に入って東部へ拡がり、さらに中部が多くなった。須崎市では床上浸水一八、床下浸水一六八。押岡では数十年振りの大洪水となり、堤防の欠壊、橋の損傷、田畑の荒廃など多かった。

一九七三 同 四八、七、二六 台風六号(中心示度九九五)

二一日室戸岬に接近した台風六号は、九州西南海上から逆戻りして二五日から再び四国を東へ通過したので二六日にかけて、本県西部地域は豪雨に見舞われ、須崎の雨量三九三mm、新莊川氾濫、危険水位四mを突破し、岡本・西町地区四〇〇世帯に避難させる程であった。市民館付近や大間本町を主として、床上、五、床下浸水一一四戸に達した。

浦ノ内湾で豪雨のため、養殖ハマチが死滅しその損害は三億円に達した。その他農作物や公共土木施設の被害など、被害九千万円に及ぶ。

一九七四

同 四九、一、二〇、昨冬一二月二〇日以来、僅か二回の雪、しぐれを除くと六十余日間の大旱魃

同 一、二四、西古市町、中田稔さん控家焼失、明治二五年、選挙大干渉事件当時、自由党员竹中靖明が、この家で政談演舌中殺害された。

同 七月上旬、記録的な豪雨で全国各地被害大。

第二章 自然災害

第一節 地震

土佐の大地震

土佐特有の地震はマグマ（岩漿）とは関係の少ない、構造地震が多く、外側地震帯の活動によるものが主で、震域も比較的広く震度も大きい。

白鳳地震以来昭和二十一年末の南海地震まで、十一回の大地震を表示すると次の通りである。

年	月	日	震域	震央	強度（マグネチュード）	
1	六	八四	白鳳	一三、一一、二九	南海、東海 NE 一三四度 三二度三五分	八・四
2	七	三四	天平	六、五、一八	奈良、畿内七道 ?	七・〇
3	八	八七	仁和	三、八、二六	京都五畿七道 NE 一三五 三三五	八・六
4	一	三六一	正天	一六、八、三	畿内、南海道一部 NE 一三四 三二二	八・四
5	一	四九八	明応	七、九、二〇	東海道全域 NE 一三六 三三四	八・六
6	一	六〇五	慶長	九、一、三一	東海、南海、西海 NE 一三四 三三〇	七・九
7	一	七〇七	宝永	四、一〇、二八	東海道、畿内、南海道 NE 一三五 三三五	八・四
8	一	八五四	安政	一、一一、四	西日本 NE 一三五 三三七	八・四

これらのうち土佐沖に震央のあるものは、1、3、4、6、7、9、11の七大地震で、沢村武雄博士の南海スラストという北傾斜の大断層上に並んでいる。そのうちでも土佐に特に被害の多かったものを、旧記により述べて見る。

白鳳地震

日本書記によると「山崩、河濡、諸国郡官舎、及百姓倉屋、寺塔、神社、破壊之數、不可勝數」とあり。直接の震動のほかに、山崩れや洪水のために、建築物の被害は無数だったようである。したがって人畜の死傷も多数に及んでいる。

「伊予温泉、没而不出」とあるが、昭和地震の際も道後温泉は一時湧出が止っていた。また「土佐国田苑五十余万頃没為海」即ち黒田郡と称して足摺から東の室戸にいたる土佐湾岸の陸地が陥没したという伝説は土佐人の常識になっている。昔「大坊千軒・野見千軒・戸島千軒」など繁栄していた町が、白鳳地震の時陥没したと伝えられ、また比丘尼の口碑などがある。

「五十余万頃」の「頃」は「しろ」と訓み、今日のおよそ一二平方キロ（一一五七町歩）に當る。これに関して次のような記録も残っている。

宝永四年丁亥、土佐国大潮之記

「住古天武天皇の御宇白鳳十二年甲申十月十四日、大地震の後、当国大潮入り人家はいふに及ハす、田地大半流失するよし古記に見ゆ。そもそも土佐の国といふハ本領五拾貳万三千七百三拾八石也、今貳拾万石余となるハ彼白鳳の大潮に三拾万石余流滅す。」

眞覺寺日記 安政三年七月八日

「古へ白鳳年中ニ海ト成し土佐田苑五十余万頃の跡、今ニ海底ニ東西数十里ノ間、岸ノ如きもの残り漁者共其の辺にて魚繩をおろすニ、船より岸迄凡百五拾尋其岸を離れ南へ少し寄れハ、海底迄三百尋程ノ深サなりト、是昔の海陸ノ堺なるへし（今夜、橋田、漁者ノ咄しを聞記す）」

慶長大地震

震源が房総半島沖と土佐沖にあつた二元的地震で、白鳳地震と同様の地盤変動があつたらしい。当時は山内氏が、土佐藩主に封ぜられた直後のことで記録が非常に少ない。唯一の記録と思われるものは、讃岐の坊さんで阿闍梨暁印という人が、安芸郡の佐喜浜に来ていて書いたものによると、佐喜浜五十余人、室戸岬、行当岬方面で四百余人、甲浦で三百五十人、阿波宍喰で三千八百六十余の死者があつたと報じている。

宝永大地震（亥の大変）

慶長地震後百二年、宝永四年（一七〇七）十月四日午過ぎ、第五回の南海地震が起つた。（第一白鳳、第二仁和第三正平、第四慶長）この地震は激しい震動が非常に広範囲におよび、壊家が二万九千に達した。沢田弘列の著『万変記』によると

四日から五日にかけて、十一・二回大津波が襲い、土佐湾の奥に当たる種崎では、波高二〇メートルに達し、潮、北は一宮仁王門まで、南は雪蹊寺の院内まで上り、余震が三年もつづき、この間高潮状態がたびたび起り、同年十一月二十二日には富士が噴火した、土佐でも三、四日後には降灰があつて、当時の人心安からざるものがあつたとの事である。

土佐藩主山内豊隆公より幕府への訴へに

流家	一一一七〇軒
潰家	四八六六軒
破損家	一七四二軒
死人	一八四四人（男五六〇、女二二〇〇）
失人	九二六人、内男八百余
流死牛馬	五四二疋、
損田	四五一七〇石、
米流失	二四二四二石、
濡米	一六七六七石、
船	手船 一七二
	売船 一三六

以上の損害を受けたので、藩主豊隆参勤せず使者として山内主馬を江戸に派遣して実状を報告した。「諸人広場に走り出づるに、五人七人手に手を取り組むといえども、俯向に倒れ三・四間の内に転じ、或は仰向

になり、逃げ走ること容易ならず」と走るところか、立つこともできない激しさであった。

宝永四丁亥年 土佐国大潮之記『山内文庫』

宝永四丁亥年十月四日須崎地震之記『南路志』

一、宝永四年丁亥十月四日巳の上刻より大地震おこりけり。今日天気快晴朝ハ暖氣にて、諸人単物帷子を着せしか俄になひゆり、其騒動詞にも又尽し難し、坤軸くだけぬるとは只此時なり。いか成丈夫達者成ものも一足も歩行ならず。山々の崩れける土烟四方に満ちて、忽闇夜の如くにて稍暫方角を失ひ、男女老若貴賤僧侶とも正氣を失ひ啼さけぶ有様ハ、魂魄いずれの所にとどまらんや、大地割れ底より潮水湧出る。人家倒れ或は崩れ只無難に有家は壱軒もなし。山里の賤夫家業の為山へ行ける所に、此難に逢ひ崩る、岩石に圧され、死する者数を不知。扱未ノ上刻より大潮溢れ入、人家悉く流れ死人筏を組むが如く、牛馬猫犬は皆死す。諸人山に逃上り危急の死をのがる、もあり、親兄弟足下に流れ死すれどもあへて助くるに力およばず、人倫之道忽に滅す。道を守るも法を立つるも唯静濫の時に極り、誰が為に啼くともなく、山谷に響き渡り鳴動する有様筆端にいとまあらず。昼夜潮入来る事明る五日の晩迄十二度往来する、辰ノ刻より潮不来、但須崎浦より三里沖、石ヶ磐より沖は海上隨分静なり。是より内大いに動く、予山の嶺より海上を眺め居けるに、戸島と長者の渡間わたまへかけ、潮悉く干つき暫の間沼となる。此所へ小船に貳人乗り流来りけるが、壱人舟より下りて沼に入と見へしが、行衛は見へず残る壱人船に有よと見へつるが否や、大潮入来右の小船行方見へず成にけり。其後その人を聞けば壱人は新町の何某、壱人ハ須崎浦惠美須屋佐五右衛門にて有つるよし、此時に當って財産箕宝悉く流失する。すぎまきもあわれも悲しきと只此時に極りぬ。

一、此地震五畿内、東ハ豆州箱根を限り、摂州紀伊等の海辺が大潮入る。九州の内も東南をうける国ハ大潮入、四国のうち阿州と当国と専ら潮高く騰る。

一、当国のうち種崎より宿毛までの内、浦々大潮いり赤岡辺より上分の灘手ハ少しつ、入し所も有。

一、須崎浦へ入来る潮、半山川筋ハ坂ノ川の在家少し残る、樹木竹篋尽く流失し望洋如無涯、下郷の内天神宮の上ミ四・五丁斗り潮上る。多ノ郷ハ加茂の宮より奥、是藤の前まで入る。吾井郷ハ為貞しんといふ所から鯛の川口迄来る。右皆々川に付て潮溢れ入る。土崎ハ在家皆々流失す、押岡ハ池ノ谷馬頭観音の下迄潮上り、鯛・すずきの諸魚も上る。神田ハ土崎続きの在家少々流失。池の内村在家障なし。

追加、此時池ノ内に不限、財宝を拾ひ取、俄に富になり、暫して貧窮となる事、ふしぎならずや。

浦ノ内は谷々多く詳に記し難きも、潮は大体山を限り海際の家流る。東奥浦、潮は山迄、東西横浪の家は家具少し残る、鳴無大明神の拝殿にも汐入、西奥浦、潮は山迄、家は高所故事なし。

野見、大谷は潮は山迄、山腹茅屋三軒残る。

安和、潮は焼坂麓迄、山腹の家残る。

一、須崎浦の死人四百余人、かように流失する所の謂れを尋るに、池より出る堀川の橋地震に落ちける所へ、潮先キ入来る。渡る便無之悉く堀川へ打入られ大半死す。尤水練を能する者、或天運に叶ひける輩ハたまたま死を遁る。

追加、此堀川の橋地震に落けれハ渡る事ハ成候マカへ共、川下より船潮に奥へ込入り、橋悉く池へ流れ入る。後

世の君子此川を埋められ、先年の通二ツ石へ堀川明キ申様に成候へハ時変に助と成申、但し此川を埋申時ハ新田畑余程出来申様、左候へハ御貢物余斗の違ひにてハ無之様相見へ申候。

一、此時流れたる在家の人々山野に居けれ共所縁由緒を求め流れ去る人家を頼み急難飢寒をまぬがれ、目もあてられぬ斗也。

一、大潮に家財箕物衣服等を流し候家を流さざる在家の者とも、是を悦ひ理不尽に拾ひ取、人の愁を不顧賊盜同類の形勢公義へ聞へ、所の庄屋年寄に被仰付、急度穿鑿させ銘々へ遣ハす。然れ共隠置出さざる族多きにつき、面々在家に込入り断なしに家内を探す、古来より入魂知音たりといへ共其訳を忘却し、卑劣尾籠の高声を出して人倫五常の道を打破り、口論鬪争に及ぶ躰たらく冷敷もあはれはかなき形勢ハ、只人道の境界とハ思ハれぬ、是非なき浮世此時にとどまれり。

一、岩永より門屋坂までの間往還の道筋海と成、或ハ道筋遺れ往來ならざるに付、鳥越坂の峠より池の内村へ横道を通り、下分村岡本へ越す、笹ヶ峠といふ古道を往還として、門屋坂山際道となる諸役人の送番所も池の内村当分有之、送夫の者共是に詰る、無程午の秋今在家本番所に帰る。

追加、大潮前ハ大間より原町古倉へ灘道有、多くの旅人此時ハ此道を往來して、原町辺賑々數候所、右大潮に道つふれ其後ハ道を造る人無之候。右道の施主ハ原町の何某とやら申者、多年思ひ付老人の勢力をもつて拵へ諸人を自由させ申由、今も潮干の時ハ灘道通る者有、今少し人夫をいれ昔ノ通いたし度もの也。

一、池水の中に死人筏を組たる如く有之、尤衣服等何そ見知へき覚有族ハ是を尋便りとせり、左もなきものハ縦令父母兄弟なりとも、佛かはりはて却ておそろしき躰と成けれハ、求むへき便なき者とも何をしるしに、是を尋んと街道に泣さけふ者多けれども其詮もなし。池の中に浮沈死骸鳶雁是を損ふあり。されハ何たる地獄に是をくらべんや、目もあてられぬ次第也。依之公儀よりの仰に随ひ池の傍に、長さ数十間斗の大穴を二行ほり、此穴に取入れ土に埋。いかに時節とはいひながら、さてさてかなしく口惜しく何たる世にか成ゆかんと心をおためぬ者ハなし。

一、流れたる者共即餓に及ふに付、公儀より御救役定られ所々に被遣御救米を給ふ。男に三合女に式合日數三十

日或四五十日の間、面々家業に取付まで被下、尤小道懸の材木等ハ手寄の山にて遣ハされ候。

一、須崎浦より下浦々御救役無足の新扨從田中善八此時の勤功につき、同年十二月十六日新知式百石被下、小仕置に被仰付、後に田中閔太夫と号す、又知行御加増五百石となり御仕置役被仰付候也。

一、郡奉行式人 祖父江作藏、堀部七大夫、

一、浦奉行式人 安喜儀兵衛、近藤与惣左衛門

須崎浦庄屋太次右衛門、後太惣兵衛と改む。元文元年夏変名字御免川淵と云、同村年寄海部屋勘之丞、同浜分年寄助九郎与八郎。

一、此大変に付諸人の心落着かず、明日を知らぬ命といひて路頭に迷ふ折柄なれハ、非道の溢れ者盜賊の族有へしと御詮義の上其役人、是も無足の新扨從朝比原忠藏此時の示方宜を以、同年新知式百石被下、小仕置役被仰付、無程御知行加増五百石賜り御仕置、其後又御加増千石に成、御簾格後簾奉行となる。

一、此時盜賊□妨溢れ諸人を悩さん事を上に御愁被為成、右之忠藏を守護役に被仰付、其在所年寄の郷士に課て昼夜廻番して賊の溢を慎む。

(下略)

佐川村某の「宝永地震記」によると、

四日朝佐川の魚商人が須崎浦へ行つて、漁船の帰帆を待っていたところ、地震と大津波に逢ふた。佐川へ帰へる途中等激しい大波で大小無数の魚が汐に酔ふて、路に打上げられたのをたくさん拾ふた。渚はこんなさまであつたが、海上は静かで遙か沖にかかった他国の廻船は見物していたといふ。その船に助け上げられた多くの人々が陸へ帰つての物語を聞くと、

地震と海底の鳴動と共に、海岸から潮が一、二丈の高さに湧き出で、浜の砂地にある家は、柱が落ち込み軒端が地についていた。沖の船から陸へ波の上るのを見ると、高さ一町程も逆上っているように見え、雲へ届く様に思はれたといふ。大浪の静まった跡までも、小山程の潮の湧く所が多かった。他国の船も湊に入ると悉く破損し、商物は残らず流失するし、海辺に住居の人々も貴賤、貧富、奴婢、僕従、僧、百姓に至るまで、皆一様に辛い目に逢った。

この地震による地盤の変化や須崎の変貌について次の記録がある。「須崎地震之記」

一、此大千世界を浮島ヶ原と云伝へし事明らか也。大地震の後、安芸郡津呂室津の湊地形上る也。先年ハ大船荷を積ても入津自由なる所に大変の後ハ、荷を積たる大船入事ならず、此湊石の切抜にて底まで石なる故、泥土に埋るといふ事なし、然れハ地形上りし証摺分明なり、(沢村博士によると、室戸岬二〇〇〜二五〇cm隆起、須崎湾、横浪の江、高知付近 一〇〇cm沈降)

高知や須崎のように、地震時の地盤沈下地帯は地震前に隆起するという特性あり。三災録に「大震の二・三日前に田畝のみみず悉く道路に上り死し、又死せざるもの数多ありて人々不審しける」とあり。これは地中に早く潮がしみ込んで潮気の嫌いな、みみずが地上へ出て来たものか。

また、「潮引き取り船動かさず、暗中なれどすかし見れば四方干潟となり、葛島佐右衛門堤へも徒歩にて行くべき有様に、夢かと計り驚きて帰へらんとすれど詮なく鶏鳴の頃少しく潮の来るに任せ、漸く下知仮橋の辺に來り、又船すはり一人綱にて之を引き、漸く夜明に市中にかへりしとぞ。

一、今在家町も大変已前ハ二ツ石より沖の方、十五・六間町並なれ共、大潮に地崩し、海式百間余地方へ寄(地

盤沈下)町に不相成故、只今(大変後三十年)の所へ町割被仰付、面々住居する。

大変より前ハ大橋(眼鏡橋)通りの横町南輪に町並あり人家ハなし。橋の詰東の方、今の谷屋の辺に嘉助といふ者老人居る、此谷屋といふ酒屋、後ハ相続して今ハ池吉屋といふ。

一、大変より前ハ大橋の北南方とも人家無之、東の方並松今の畠の所皆芝原也。中頃高知の北山の百姓十蔵と云もの、池を作式に申請、是を手作にせんが為、糺の宮の前東の原芝原に家を建て居る、大変已後は是も故郷へ帰る。

一、今在家町の筋、二ツ石より宮原へつ、き大木の松林にて、日当らす物くらき所にて、小児共ハおそれ、老人居來せず。右の松原の跡、今の町並にて依之今の町の後の畑になりたる所、皆々芝原にて糞虫の名所なり。大變の後作目となる。

一、宝永五巳丑年(一七〇九)十月町割有、御免方右町割役人諏訪半兵衛
追加、二ツ石大變前ハ人家の裏に、少の岩小路脇に有、大變に地形不_ほ崩れ、大岩二ツ出る。則ち今の二ツ石也。

一、西今在家町(西町)先年の町より十間斗、山の手へ寄西のはつれ、五郎右衛門屋敷ハ(今の伝助)与三兵衛(今の与三兵衛の親)前に井戸ありけるが、只今の川向ひ中洲の辺なり。紺屋安左衛門(今のかとの弥五郎親)、与惣兵衛(今の与惣兵衛親なり)前に井戸有。唯今の川の向の辺に其井戸、前方ハ見えたり。

右之条々差当り無用之義に候へ共、自然先規之事入用之時之為、我等慥に覚之儘記置也。

一、石地藏、二ツ石 宝永四年大變に流失之者三十三回忌為追福、元文四年建之。

須崎八幡宮 木札、(この木札は須崎八幡宮に現存する)
宝永四丁亥十月四日時変大潮入

須崎本村浦分共亡所有増記

一、損田五百九拾弍石 須崎本村内 百九拾石余 本田

四百弍石 新田

一、流家四百三拾弍軒 内 弍百十六軒 本村

弍百十六軒 浦分

一、流失三百三拾一人 内 男女百九十六人 浦人

男女百弍拾九人 本村

男 六人 他国者

一、寺三ヶ所 大善寺、西願寺、孝山寺

一、堂社十ヶ所

八幡宮二社、若宮一社、夷堂一字、阿弥陀堂一字、観音堂一字、地藏堂二字、虚空蔵堂一字、大師堂一字

以上。

一、御制札場並御分一屋、御米蔵、廻船、漁船、網猟具、地下人財物不残。

一、潮高サ四方山根ヨリ二間計、近郷ハ上分遅越関限り、吾井郷ハ鯛ノ川関限り、押岡ハ在所中、神田ハ八王子
奥限入。

一、地下人当時及即餓、国守より飯領被為成下、日数十日御救請面々小屋懸、古城山下、一兩年令住居、段々町

割仕振より南住宅其後辰九月御地詰地面相極安座仕也。

一、八幡宮再興宮林立枯百本余申請売立並氏子加奉銭成就則棟札明白也。

一、御興從豆州、子九月十一日御下向奉納畢、此送状志州鳥羽船宿、齊藤林之介方より指下故永々伝氏子為祈、
万歳此裏板写置本紙各別封置所也。

右此寄進施主洲崎本村住人本村浦共支配庄屋

川渕太次右衛門、奉掛宝前者也。

享保二丁酉八月吉辰日

敬白

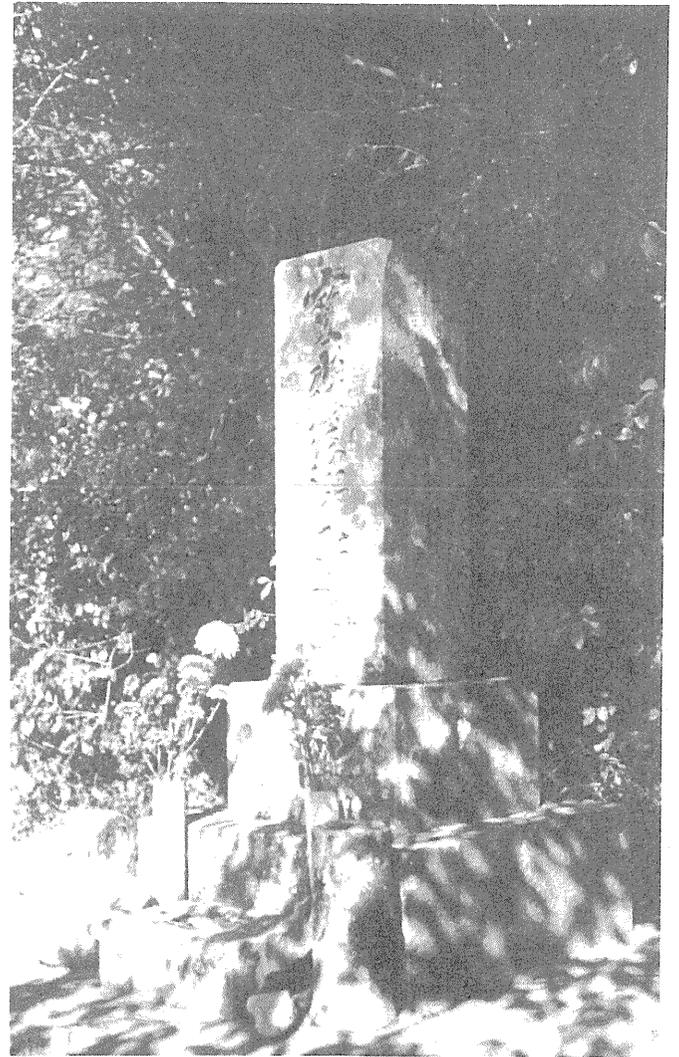
好維

表面には

一、御八幡宮様として御興還御の次第につき書いてある。側面には 筆者 二標八良兵衛 書之 とあり。

宝永津浪溺死の塚

発生寺の住職・智隆は、安政三年十月、宝永亥の大変の百五十年忌に際し、古屋竹原や素封家(亀屋久蔵・鍛治活助・橋本屋吉左衛門)の協力により、宝永津浪の犠牲者四百余人の死骸を改葬し、宝永・安政二度の災害の概況ならびに、これらの被災を少なくするための心得を後世に残そうと、大善寺下にこの塚を建立した。



宝永津波溺死之塚（大善寺山）

寶永津波溺死之塚

此塚ハ宝永四年丁亥十月四日大地震シテ津浪起リ須崎ノ地ニテ四百餘人溺死シ池ノ面ニ流レ寄り筏ヲ組ミタルガ如クナルヲ池ノ南面ニ長キ坑ヲ二行ニ掘リ死骸ヲ集メ埋メ在リシヲ今度百五十年忌ノ弔ニ此處ニ改葬スルモノ

也其事ヲ管マントスル折シモ安政元年甲寅十一月五日又大ユリシテ海溢シケルガ昔ノ事ヲ傳聞且記録モアレバ人々思ヒ當リテ我先ニト山林ニ逃登リケレバ昔ノ如ク人ノ損ジハ無リシ也唯其中ニ船ニ乘リ沖ニ出ントシテ逆巻浪ニ覆サレテ三十餘人死タリ痛マハシキ事也何ナレバ衆ニ洩シテ斯ハセシニト云ニ昔語ノ中ニ山ニ登リテ落クル石ニウタレ死シ沖ニ出タル者悉ナク帰リシト云事ノ有ヲ聞誤認シ、モノ也早く出テ沖ニアルハ知ラズ其時ニ當リテ船ヲ出ス事ハ難カルベシ誠ムベキ事ニコソ将昔ノ人ハ地震スレバ速テ津浪ノ入ル事ヲ弁ヘズ浪ノ高ク入り来ルヲ見ルヨリシテ逃ゲ出デタレバオクレテ加堂ノ如キ難ニ逢リゲニモ又悲マザランヤ地震スレバ津浪ハ起ルモノト思ヒテ油断スマジキ事ナリサレドユリ出スヤ否浪ノ入ルニモ悲ズ少ノ間ハアルモノナレバユリ様ヲ見斗ヒ食物衣類等ノ用意シテ扱石ノ落ザル高所ヲ撰ビテ遁ルベシサリ速高山ノ頂ニ迄登ルニモ及バズ今度ノ浪モ古市神母ノ辺ハ屋敷ノ内ヘモ入ラズ昔モ伊勢ガ松ニテ数人助リシトイヘバ津浪トテサノミ高キモノニ非ズ是等百五十年以來二度迄ノ例ナレバ考ニモ成ルベキナリ今茲ニ此當ヲ成スノ印且後世若斯ル折ニ逢ハン人ノ心得ニモナレカシト衆議シテ石ヲ立其ノ事ヲシルサンコトヲ余ニ請フ因テ其荒増ヲ挙テ為ニ書付ル者也。

安政三年丙辰十月四日

古屋尉助 識

本願主 発生寺現住 智隆房松園

世話人 亀屋久藏 鍛冶活助 橋本屋吉左衛門。

安政大地震（寅の大変）

宝永大地震後百四十七年を経た、嘉永七年（一八五四）十一月四日・五日兩日にわたり、東海・南海・西海にかけて、M八・四の大地震と、十一月二十七日改元それに伴う大津波が襲い、全半壊、火災及び流失家屋の被害が、計七

第1節 地震

万戸を突破し、死者三千人を出した。
土佐の被害（藩主豊信公から幕府への報告）

須崎地域

潰家	二九三九軒	九五軒
半潰	八八八八軒	四〇一軒
焼失	二四六〇軒	
流失	三一八二軒	五五〇軒
死者	三七二人	(男 ^{九六} 女 ^{二七六}) <small>浸水家屋一五一軒</small>
田地高	二一五三〇石	三六一〇石
船舶流失	七七六隻	一三七隻
漁網流失	三七七張	六七張

宝永大地震に較べると被害は比較的少なかったが、当地域の状況について、観音寺深阿の記録を中心に、各村誌、真覚寺日記、円教寺記録、発生寺過去帳などによって述べる。

十一月四日朝四ツ時、地震あり桐間汐田新塘を、汐切入り西崎古堤まで来る。

新荘でも大汐来り、安和では七回も来襲―流失家屋十一軒。

同五日七ツ半、碎ける程の大地震、しばらくして大汐来り、老若共泣き叫び、山々へ逃げ上る。間もなく茅屋敷軒流れ来る。其夜から隣家残らず祇園の社で野宿、汐先は加茂宮馬場先の下まで来り、竹の端下小道まで流船来たる。大間の店屋庄蔵、為蔵、龜蔵、紺屋儀吾郎、文六、百姓浅次郎都合五軒流失する。

東西往来の道、所々大波汐先来り往来留る。

赤崎の下には数貫のうつばが波に残されその腐敗臭は鼻をついたと。土崎真福寺等残らず流失、庄屋中平家も浸水し長押に藻屑がかかっていた。神田村は福生寺下まで汐先来り、押岡村天神近迄汐先来る。

吾井郷は為貞の正善寺の前まで来り、流家七・八軒、松ヶ瀬の上の方に須崎の船が流されて来た。野見、大谷夥しく傷む。

新荘方面については次の記録がある。

強震後半とくにして轟然坤軸砕けんばかりの音響と共に、山なす波浪襲来したれば、人々何物をも取り得ず、生死の境をまっしぐら、最寄の山へと馳上り、泣くもの罵るもの怒るもの、老を呼ぶ声幼をさがす声、遠近相応じて、其喧しさ其悲哀譬へ難し、而して渦巻来る津波の猛く早きこと、比するものなく満ちては引き引きては満ち、都合七・八回一進一退の都度、家を漂はし船を浮べ来りて其光景言ひ難し。而して此汐先は長竹・岡本角谷一円を洗ひて川を溯り、柿谷堰（神母木堰）に止る、中氏にはさしたる害なし。

古屋造作氏の須崎志やその他の記録によると。

安政元年甲寅十一月四日朝五ツ地震あり、さ程強くはなかったが、長時間ゆれ動き、そのうちに潮が狂ひ、堀川に逆流し港内の船舶を終日、西へ東へと漂していた。折柄この日蛭子祭の相撲が、八幡様の前の浜で興行され人々が群集していたが、この様を眺め一方ならず心配し、早くも山へ逃げ上り、夜半に家に帰ったものもあつた。

翌五日は天よく晴れ渡り、一片の雲も風もなく、人々安堵の思ひをしたが、夏の様な暑さであった。相撲の翌日のこととて酒宴を張る家も多かったが、夕刻七ツ半時に大地震起り、忽ち暗夜の如く、大地は所々に三尺、四

尺、五尺と裂け、中から潮の吹く所もあり、土煙を飛ばすあり、一開一合山崩れ谷裂き、住家や土蔵皆倒れて算を乱し、人々は五人六人手に手をとって、泣き叫び西に東に駈廻り、父子兄弟互に呼び、或は俯伏せに或は仰向きに倒れ、二三間歩いては倒れ、歩行自由にならず、半時ばかりにて稍々小震となった。

此時人々は宝永の大変の如く、大汐が溢れ来るかも知れない、早く山に登ろうと我先に取るものも取敢えず山に駆け登る。稍々心豪なるものは蒲団等携え逃れたが、時しも大汐天を蹴って海門に衝いて来る。その物音凄じく、乾坤崩れるかと思えばかりで、凄惨な光景であった。

堀川の橋は皆地震に揺り落とされて、其上に潮水二・三丈高くなり、数百の家や船を浮かして襲ふた。これを見て逃げ後れては大変と、走り出したが堀川は渡れないので、早く西の五紋中山へ登れと呼び叫ぶ。皆先を争ひ刈谷の方へ走って行ったところ、二つの石の堤防が破られて、大木人家等を池中に押し流す。数百の人々が打渡らうと水中の洲上に躍る様は、誠に哀れであった。しかし幸にも宝永の津波よりは潮嵩が低かったたので、潮の退く間を見て、辛うじて西の山に登り、一命をとり止めた者もあつた。既に日が暮れ暗夜に大小の地震が幾十度、人々は暁まで一睡もせず、神に念じ仏に祈る。夜が更ける程に、着衣に凍る霜は雪より白い、当夜山々で親子離れぐになり、生死も分らず、親は子を呼び子は親を慕ふて、泣き悲しむ声は哀れであつた。

六日晴天、小震はまだ止まなかつたが、壮者は各々家に帰って見ると、家はあつても壁は落ち柱はゆがみ瓦は飛び、一軒として完全なものはなく、我家に入つても衣類や米味噌等、手当り次第に取り、また山へ逃げて行つて、不安のうちを日を送つた。

その後ほとんど毎日のように地震あり、特に十二月十四日・卅日には大ゆりがあり、村人は家に帰へることも出来ず山で暮していた。

宇佐真覚寺住職井上静照師は、地震を主として日記を残しているが、安政元年極月十三日、須崎よりかへつた人の話として

「浦人三拾余人死失之由、其中多く大汐入る事をするまま、直ちに浜へ走り出船にのり、其難を通れんとせしに浪高くして、のる事も出来難く兎や角する内、船と船との間にて摺きられ、五体半分に相成死せしもの多き趣云々」とあり

また、中田稔氏によると、発生寺過去帳には

「五日七ツ時大地震半時ばかりたちて大潮入来、其時地震に而家蔵潰れ地少し引さけ候に付、浜町五・六軒の者一同、小船四・五艘に取乗り、地震の難を海上にのがれ候場合、大潮押来り、右船中の者大凡流死す。後世覚悟の為記置、右の内一艘の船無難に而、矢井賀浦江着、其餘死人左に記す」と八家族三十二一の名をあげている。

長谷川文書には次のように、地震による地盤変化について、室津方面の隆起と西浦の沈降が記録されている。

「寅ノ年の大変津波に付、潮高くなり地形下り候事、左記にも有。此度西浦之磯辺の石、潮に隠れ見えぬ様に成、又室津之湊大船出入不出来様になり。東は上り西はさがりたる事分明なり。」

翌六年正月二日から五日も大ゆり、鳴動烈しく人心競々として安き日はなかつた。家を失ひ職につくことの出来ないものために、郡府の明小屋、文武館及び発生寺の門前に、大きな仮小屋を建ててこれを收容し、男子には三合、女子には二合四勺を給し、漁民へは漁具を給与した。

一、此度村々貧成者共、迷惑之折節に付御公儀より御救米被仰付。

高岡郡は当村役場御山方、坂元清太郎、御救役なり但し漁士ハ男子ニハ米三合巻人前、女は式合四勺後は沖漁ニ参ル者五合ツ、被仰付候也。

この大変に際して家財衣服など流失したが、それを理不尽にも「火事泥」が横行、その取締りのため次の様な布告が出ている。(長谷川文書)

一、此大変にて浦々家財、衣服等流し候所、是を幸ひ理不尽に拾ひ取、人の哀をも不顧、目前の事柄御公儀より村之莊屋、年寄に被仰付、急度御詮義有銘々江被仰付、依而御国内一同高札立其文左之通、此度之時節を伺ひ、致盗業ものハ其職に不抱、召捕勝手次第、若手向におよひ候時は打捨有共不苦事。

寅十一月

右之通御国内一同、村之取立や当浦ハ御郡方役人日々廻番有之。

一、此時当地役人

郷浦大莊屋 川渕専平 昨年五月二村替に付久礼村へ行

此浦ハ北川より来る 御莊屋 吉村虎太郎

また久礼村浦莊屋より浦郷大庄屋、川田紋左衛門

古市町郷年寄 孫 作

右弥作安政四巳四月郷浦惣年寄卜成

横町 浦老吉松屋喜左衛門

同 池吉屋宇太郎

「上ノ加江浦組頭、利岡清左衛門の地震記録」(上ノ加江町史)の中から須崎に関する部分を転載すると、

抑嘉永七寅年安政元改曆霜月四日朝五ツ時(此時地震致し候得共少細なる事)須崎浦例相撲執行に付き段々船にて見物人参る処、我今秋ふと

痛風と云ふ病を養ひ、多野郷の医師生野某の調合薬にて本復を遂げ右謝礼の為め便船致し友輩に後れ相撲見物に時を移し、生野へ失念になり翌五日五ツ時、彼の地へ礼に参り、宮尾へ帰船便の世話を相求め度存じ候内、

久礼浦番喜与作、政屋克之丞其余夥しき客になり九つ相終り、徒然に移り亦々橋本屋松次郎宅へ参り、久礼番

頭逢客とて宮尾の慶益老を始め政屋勝之丞と我と都合五六人酒宴に時をうつし、七つの中刻大地震いたし

右往左追に紛れ、狂気半乱の折柄本家若松屋甥幸右衛門・久礼番喜与作に行き逢ひ逃げ支度舟を待合せ候所へ、

矢井賀浦勝之助と申す男参り合せ片時も逃げ候はんと、数百人の中を四人手を引き池の内の山の奥へ登る折柄早

須崎の湊へ津波入り、古倉より原の辺又は土崎辺の家数百軒流れ行くを遠見いたし、殊に嶮岨なる峰毎々の震

に心を悩め逗留の兄弟妻子を気遣い其の夜彼の山中にて憶ひ悩む事、命も縮まるなり。夜中震数減せず折々大

震あり。さて翌六日暁四人評議の上一旦帰浦せしめたき思慮に基き其辺に居合せの者へ委細に、須崎への便宜

を致して置き、下分支配の人家へ下り着き飢を凌ぎ度き段沙汰致し候へば、老母哀れを添へ芋などを出し、ぬ

るき茶にてのどをうるほし、はだしの者は古き草履をもらひ、上分支配の下郷と申す処へ渡、老源次郎と申す

者の方にて近隣の百姓相集り俄に汁を焚き暖き飯にて腹を養ひ調へ、誠に嶮岨なる焼山の細道を越え、阿波村

の奥へ下り本村へ出(山崎八助)し処此地も段々流家あり、現に庄屋八助宅余程傷みと相成、未だ村人も道具を持たずして

逃げ形なり、八助も是を制すといへども矢張り震止まず、殊に潮の狂ある故一同肝を潰し恐ること生きた心

地はせざりけり。右庄屋八助に大変の愁礼終り焼坂を登る中にも度々鳴動あり嶮岨なる所は山崩れ、又は峠よ

西平道大に割れなど多く歩行致す内誠に気味悪し云々。

大野晟輔(神田村庄屋)の記録(高知市、大野精一氏蔵)

第1節 地震

安政二年十二月、須崎御郡方へ被召出、去寅大變之節、米穀諸品共寸志指出候趣、奇特之至依右御褒詞被仰付候。但し、前年嘉永七寅年十一月五日、大變地震大塩上村山キド迄、北は吾井郷尾殿迄汐入、人家和田塩木七軒流失、谷汐塚二十流失、土崎不残流失中平一軒相残ル。

安政五年十二月、御郡方被召出、平常役方出精相勤、且前役於納所場二廉々引負分束テ、米貳拾石五斗余先々私方致シ遣不而已、去ル寅年大變之砌、流失家田地塩入等不鮮、追々今難涉者有之ヨリ成立之儀心ヲ配リ、給主ヨリ金子借入等ヲ以世話方行届、又今七月居村並土崎町困窮之者共へ米五石余致配通遣シ、其ノ余難儀体之者へハ米錢少々允補遣シ、惣テ地中之為ニ相成、地下人共一同今帰服候赴彼是奇特之至依之御褒詞被仰付之。高知、鷹匠町水門御番人、嘉助調査、

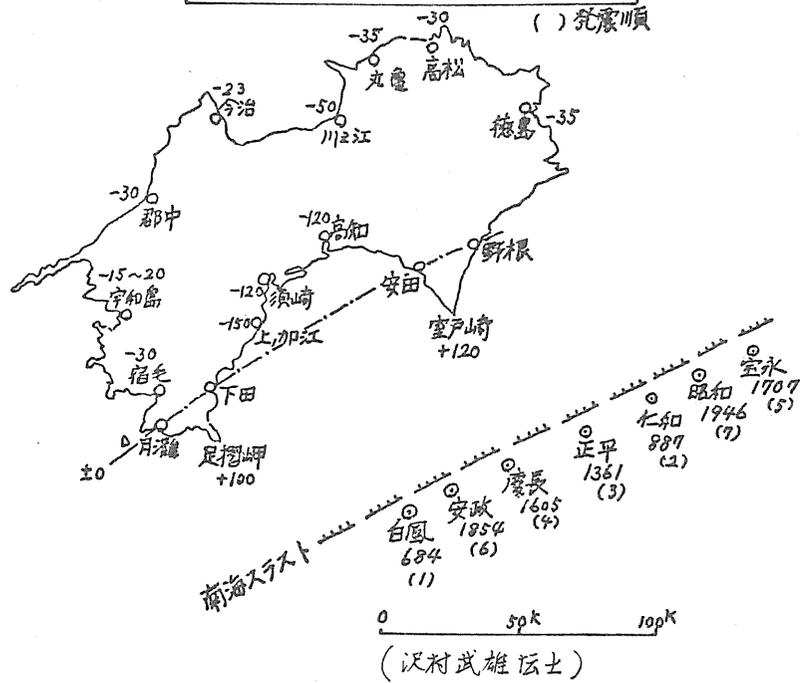
安政元年十一月—翌年三月迄ノ震動数

	大震	中震	少震	計
安政元年十一月	七	四四	九六	一四七
十二月	三	二〇	七三	九六
二年 一月		八	一〇七	一一五
二月		七	五六	六三
三月		六	四三	四九
四月	一	四	四一	四六
五月	一	二	三一	三四
計	一一	九一	四四七	五五〇

安政元甲寅 大地震 被害状況 徳永達助記録 (平尾文庫) (嘉永7) 11月4日~5日

村	浦	家流失	全汐入	潰家	全半潰	御普請所	往還筋	本田	新田	船網流失	麦作	死傷不明	其ノ他
浦ノ内郷浦		1		11	40	210間	16丁損	汐流 280丁	圍堤87間破	32隻 15隻	113丁汐入	男 5	土橋4ヶクミ
奥浦東分			33				数ヶ		汐流 26石 堤 296間			男 1	
奥浦西分					大破 7	300間		損田170丁	損田 53石 圍堤 246間		80丁汐入		橋 1
桑田山					10							男 1	
吾井郷						4ヶ所	3ヶ所 40間	損田 170丁	損田 4名		78石		
多ノ郷		10	7		2	8ヶ所 200間	6ヶ所 500間	" 150丁	" 300丁	3隻	150丁		接智堂 1、流失橋 1、
神田		37	28			8ヶ所 200間	3ヶ所 100間	255丁	汐入 176丁		100丁埋入		
土崎		24						御免草 9石 圍屋式	1石			男 1	寺、社、各 1
押岡		2			14			10丁	汐入 不明	4隻			馬 1、
野見・久通		60	4		10	340間		汐入 8反2代	120丁	15隻 24隻		男 1	
大谷		14			5	240間		120丁	堤 60間			男 2	馬 3、
須崎村		132			32			堤 汐入 150石 流失 210石	堤 30間 流失 150石			男 2	津流 2ヶ、柱 1 大破 板橋 1、" 2 流失
須崎浦		138			119	1ヶ所				83隻 27隻		男 9	御分一家 1 流失 損 地蔵堂 1 大破
安和		11	16	28		1ヶ所 30間	巻ヶ所	汐入 61石	損田 5石 埋入 18石			女 4	米塙車屋 1 流失 網屋、監、80
上下		45			45	600間		汐入 920丁					
合計		485 3 550	144 7 151	84 2 3 55	374 2 2 401	約2420間	約1600間	約2270丁	堤 約 720間 約 1340丁	船 137隻 網 67隻	530石	男 21 女 29 計 50	

図1. 南海道地震震央と地盤変化



南海大地震

昭和二十一年

南海大地震

発震、一二月二一日

四時一八分三秒

震央 E一三五度二〇分

震央 N三三度

地震の大きさ、M八・一

初期微動経続時間、一八秒三

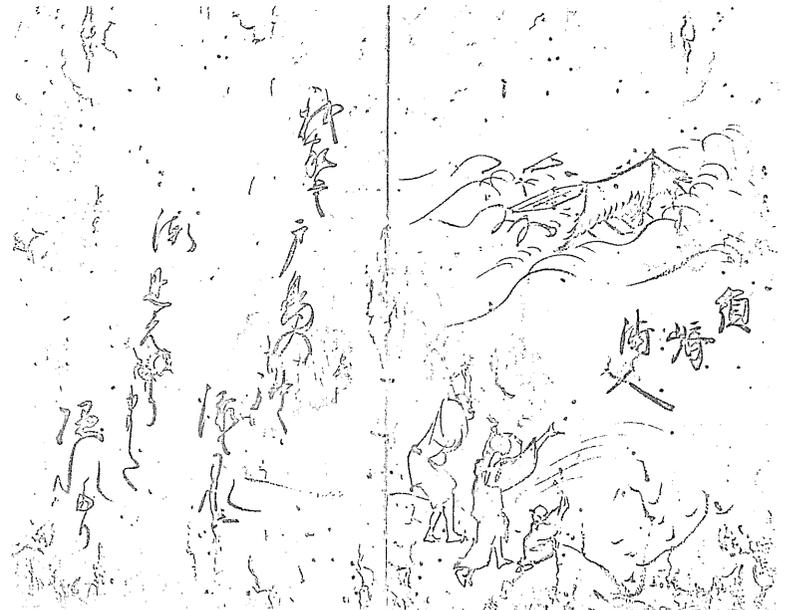
震度、六(裂震)〜七(激震)

最大震幅、四八ミリ

主要動 東南東

総振動時間 九分余

地震の原因は図一に示した南海トラストの活動によるもので、これは潮岬沖から足摺岬へかけて、大きな北傾斜の大断層で、この断



安政元年絵本大變記 著者不詳(県立図書館蔵)
土佐各地の被災のさまを軽いタッチでえがき、それに百人一首を模した狂歌を添えたもの。写真は須崎関係のもので

須崎浦人

我家は戸島の沖へ流されて
潮見せたりまた隠れたり。

地震に因んだ、狂歌と短歌

安政地震 千々川の住人 鉄弥

安政(安静)にしても地震は止まぬなり

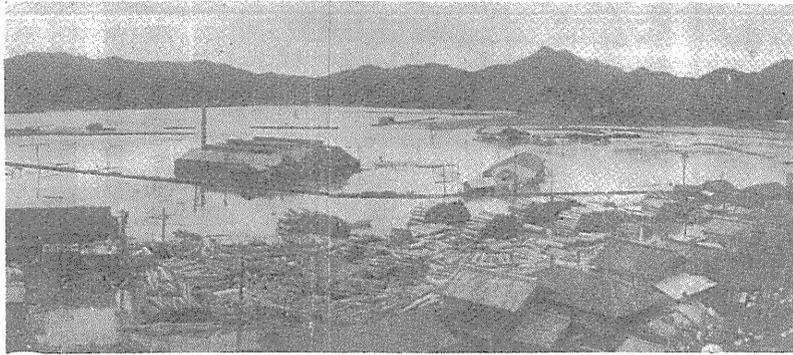
こんなことなら嘉永(替)でもよい。

チリ―地震津波 須崎 千頭 泰

貯木場に雪崩るる如く寄せし潮

立直るべくひととき弛む。

第2章 自然災害



祖父伝来の田畑も一瞬にして水底と化す（広報すさき）
（大間西より西崎土崎方面を望む）



須崎原町ノ浸水状況（広報すさき）

昭和三十五年のチリ―地震津浪

五月二十四日の早朝であった。正に晴天の霹靂!!チリ―海岸に起った地震に伴う津波が、二万キロ近く距てた日本に來襲するとは、専門家はいざ知らず、われわれ市民にとっては全く寝耳に水であった。

日本時間にして二十三日四時十一分、南米チリ―沖でマグニチュード八・七五の大地震が発生したが、これに伴う津波が、時速七二〇キロの速さで丁度二十四時間後、日本の太平洋岸へ押し寄せた。最も早く津波を感知したのは四時三十分頃と報告されているが、これは第二波のようで、第一波は須崎では三時四十分頃であり、当日須崎港にいた巡視船「おきちどり」が午前四時五十五分頃船尾が岸壁にぶつかって強い衝撃を感じた、満潮の時刻なのに潮がどんぐりひいたので、はじめは地震かと思つたが二十分くらいしてまたひきだしたので、津波を数回経験している藤本機関長はとっさに判断し、乗組員に知らせた。顕著なものは四時五十分から十八時二十分頃まで十数回、堤防を越える津波が來襲し、其の後二十八日夕刻まで異状潮位が続いた。

五月二十六日の高知新聞によると

「野見ではいち早く出した避難警報が被害を最小限に食い止めたため地区民から感謝されている」と二十五日開かれた緊急須崎市議会全員協議会で竹林義三議員から明らかにされたもので、市内野見で二十四日未明、

湾内の異状干潮から津波の前ぶれと気づいた須崎警野見連絡所の谷巡査は市消防団南分団の東山分団長ら幹部と話し合い、法とは関係なく臨機の処理で午前五時サイレンを鳴らして避難するよう全地区に知らせた。このため同地区二百四十戸のうちほとんど全戸の人が裏山に避難、間もなく押し寄せた六時過ぎの第四波にも適切な事前処置をしていたため浸水被害も最小限に食い止めることができた。下略

チリから一〇〇〇キロの地点にあるハワイでは、津波の来襲は十六時間後で波高は一・八mに過ぎなかったが、一八〇〇キロ距てた日本で二mと津波が強くなったのは途中で北米、アラスカ附近で反射し、ニューギニア、フィリピン方面で反射したものが、直接太平洋を横断してきた津波といっしょになって日本に殺到した。

(安政の大地震の津波が十二時後、北米サンフランシスコに達した。)

当時気象庁は地球の反対側に起った津波がまさかそんなに強くなるとは考えていなかったようである。別図・津波の高さを示したように、湾口で二mぐらいのものが湾内に入ると、急に高くなり南海地震のとき、四・五m近くになった。

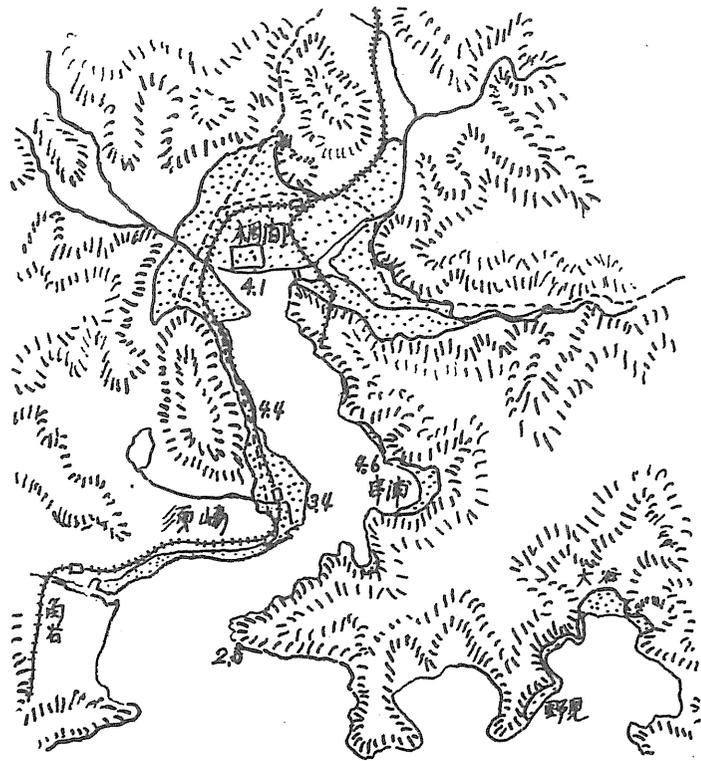


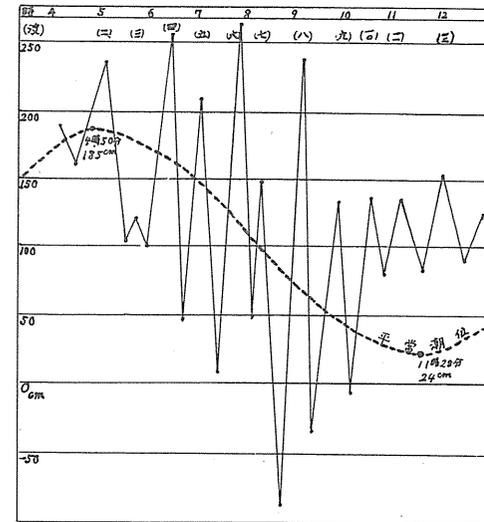
図8 チリ-津波浸水地域 (数字は津波の高さ)

湾内の異状干潮から津波の前ぶれと気づいた須崎警野見連絡所の谷巡査は市消防団南分団の東山分団長ら幹部と話し合い、法とは関係なく臨機の処理で午前五時サイレンを鳴らして避難するよう全地区に知らせた。このため同地区二百四十戸のうちほとんど全戸の人が裏山に避難、間もなく押し寄せた六時過ぎの第四波にも適切な事前処置をしていたため浸水被害も最小限に食い止めることができた。下略

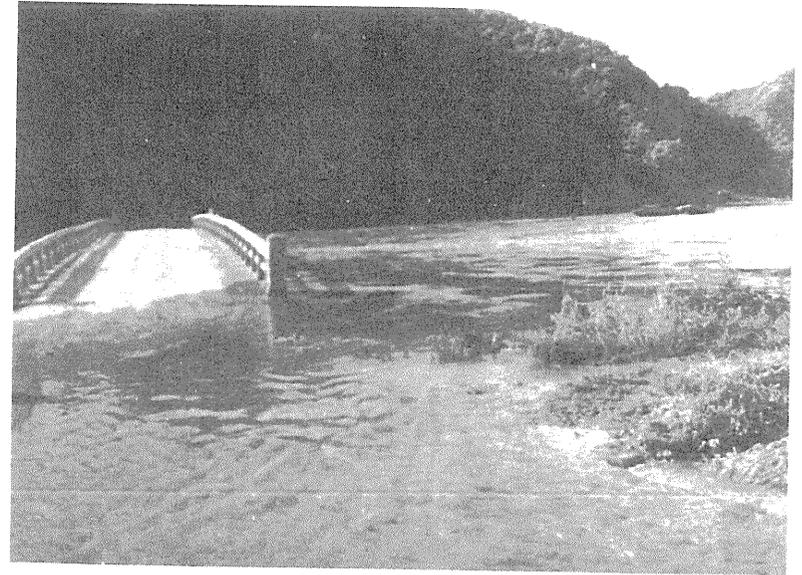
チリから一〇〇〇キロの地点にあるハワイでは、津波の来襲は十六時間後で波高は一・八mに過ぎなかったが、一八〇〇キロ距てた日本で二mと津波が強くなったのは途中で北米、アラスカ附近で反射し、ニューギニア、フィリピン方面で反射したものが、直接太平洋を横断してきた津波といっしょになって日本に殺到した。

(安政の大地震の津波が十二時後、北米サンフランシスコに達した。)

図7 5.35.5.24 チリ-津波 (桂浜無人観潮器) 最高265cm~最低80cm? 潮差345cm?



日本各地、津波の高さ
 釧路 八戸 小湊 尾鷲 潮岬 須崎 宿毛
 3.5 5.0 4.3 4.0 3.0 2.0 2.0



潮城橋付近の津波



湾奥の御手洗川・桜川・押岡川などでは、河口から海水が水壁（海嘯）をつくり、数mの秒速で逆流しまたたき間に、橋桁に達し堤防を越えて内側の田畑に滝のように落下するさまはすさまじかった。写真は午前八時頃、潮城橋付近の状況で多分第五波であっただろう。（編者撮影）

「広報すさき第五七号」によると

「第一波が四時五五分、第五波が七時三五分」とあるがこれから平均周期を計算すると四〇分となる。桂浜の験潮儀の記録も別図の通り、第二波から第十波までの平均周期は約四〇分となっている。

須崎地域の被害は次表の通りで、主な被災地は南海地震津波と大体同じく、大間付近、原町地区、野見大谷方面であった。ことに桐間堤防全長八〇〇mは再び寸断されたが、前の復旧当時の資材不足による構造上の欠陥があった。すなわち堤防の中心に海水の浸透を防ぐため粘土を詰めその周囲をくり石で固め、上に石垣を積み重ねただけでセメントの使用が少なかったため、激浪に耐え切れず決壊した。

また前回同様大間地区や須崎棧橋付近には貯木場が多く、この木材が浸入した海水に乗って押流されて民家に暴れこみ多くの害を被った。

国鉄は、須崎・多ノ郷駅間二・六キロのうち、延べ一・六キロには道床が洗われ、所々大穴をあけたので延べ八百人の突貫作業により復旧につとめ二十七日朝から開通することができた。

須崎市の被害調

住家	全壊	一七	道路損壊	四ヶ所
流失	二	橋	流失（大峯橋）	一

第1節 地震

半壊	三五	堤防決壊	二七ヶ所
床上浸水	六一七	鉄軌道	二 <small>ヶ</small>
床下 <small>リ</small>	三一九	木材流失	一一八八〇石
非住家	一一三	船舶被害	七二隻
耕地流失、埋没	四五町六反	建物・船舶を除く被害総計	七億五〇〇〇万円
冠水	一七二町歩		

津波之碑 高知県知事溝淵増巳書

須崎港は県下随一の良港であるが古来しばしば津波の災を被っている。近世の大津波はまず宝永四年の津波でこの津波は十月四日巳の刻の強震が誘起し、その高波は西は新莊川を下郷までさかのぼり、東は土崎神田などを洗い、死者四百余を出している。次いで昭和二十一年の南海大地震が誘起した大津波は暮二十一日午前四時十四分の初震の後三十余分にして三波が襲ったその潮の前線は櫻川の上流に及び多の郷吾桑の平野部の大部分を侵し多大の損害をもたらしたが、さらにその引き潮は一・五メートルの落差をなして無数の材木を矢のように流動させつ、古倉沿いに奔流となつて原町から新町浜町をひとのみにし全市を席卷した。この空前の災害により死者六十一負傷者百四十一家屋の倒壊百六十八流失百六十八焼失九を出し失つた船舶六百八十三に及んだ。昭和三十五年のチリ津波は幸い死者は無かつたが堀川が導入した高潮で家屋四千余が浸水し損害は八億円に達した。たび重なる津波による惨害にかんがみ須崎市はこのたび港湾に堅固な防波堤をめぐらしさらに常に災害の誘因となつた堀川を埋め立てて自今の備えと万一に際し市民の城山避難の安全を期した。この碑はその記念に建てて津波の恐ろしさを

後の世に伝える。

西曆一九六五年五月

高知大学

学長

久保佐土美撰

吉村 照吉書

第二節 風水害

一、新莊川の洪水

新莊川の氾濫は古来幾たびか繰り返しかえされ、沿岸住民はその都度多くの害をうけ、それを少しでも軽減しようとして、多大の労力と経費を以て、堤防の構築に努力して来たと考えられるが、その例をあげると、

元亨院突堤

昔の新莊川の下流は、今よりはるかに南にあつて、堂面(免)の山角に向つて流れ、堂面の池(昔の河の跡)から河口へ注いでいたが、出水毎に高保木の山にはねられ、往々南岸を崩して氾濫するので、寺領が荒廃した。これを慨いた元亨院住職某は、あらかじめ数百人の人夫を募つて、一夜のうちに大きな突堤を築いたと伝えられている。このため川の流を北方に変えて、以後右岸の茶屋ヶ芝のあたりは沃野と変つた。この堤防を元亨院刻といふ。

金八堰

「須崎の野中兼山」といわれる佐々木惣之丞（通称金八）は寛保三年（一七四三）中島部落の農家に生れた。当時この附近（今の中学校附近）は新莊川の川原で、その中洲にあたる同部落を中島とよんでいたが、惣之丞は何とかがして洪水の害をくい止めようと、まず川の左岸に第一堤防を築き、さらにその内側に第二、第三



佐々木惣之丞墓（新莊岡本）

の堤防をつくり、必要などころは四段構えにして川の氾濫を完全に防いだ。十数年にわたり骨身を碎き、寝食を忘れて血のにじむ苦闘をつげた結果、五十余町歩にのぼる田畑を開拓し、近郷切つての豪農となった。

この成功のかけには惣之丞の妻お米の内助の功がきわめて大きかったといわれ、当初工事費に当てる資金二

百両は、お米が遠く高岡まで出かけて、ようやく借用してきた話も伝えられている。

現在新莊大橋の東詰北側に遍路道をしめす石地蔵が立っているが、これはお米の功績を顕彰し、その労苦を供養するため、後世の農民が建てたものといわれ、延長およそ四kmにおよぶ堤防のおもかげは、今でもはっきり残っており、国鉄新莊駅南の防潮堤を付近の人は金八突堤（はね）と呼んでおり、同駅東方約百mにある小鉄橋下付近には、金八堰というところがあつて、西町住民たちの洗濯場になつていたという。

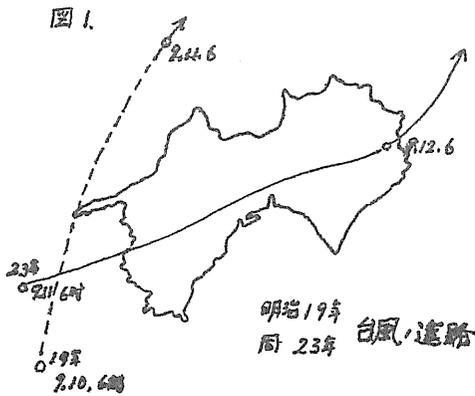
惣之丞は文化十四年（一八一七）八十歳で没したが、妻お米はこれより先、寛政十二年（一八〇〇）にこの世を去っており、ともに同部落裏山の雑木林の中で、永遠の眠りについでいる。（「おもかげ」による）

明治二十三年九月の新莊川の大洪水

この洪水は図のように、七五〇ミリの雨台風の中心が九州から四国を横断し、九日頃から県下各地に豪雨をもたらし、十一日には盆を覆えず大雨で被害甚大、嘉永二年七月九日〜一日の大雨。明治一九年九月一日の台風によるものと共に、土佐の三大洪水と称せられる。

特に新莊川筋の出水は夥しく、未曾有の損害を与えた降雨量について当地域の資料はないが、高知市の雨量を参考にあげると

十一日 一〇時―一四時 五七・一五



一四時—一八時 一六五・〇〇
一日ノ合計 二八二・一〇

旧上分村役場所蔵の水災一件書類から被災の状況を述べる。

(朝比奈利喜氏提供)

具申書

一、金貳百貳拾八円也 但、小家掛料三拾八円分
一、金千七百五円九拾五銭。但、食料、三百九円分

百八拾九石五斗五升。石、九円替

右は明治廿三年九月十日より降雨となり翌十一日に至り暴雨甚敷して、水勢は相嵩み山林原野は崩壊し、一時に土砂を押し流し為に水量は平水より、二丈余の高水となり洋溢して、堤防を決壊し田畑を押し流して家屋の埋められしもの五十一戸、其他半倒、流失戸数百五十七戸にして、且田畑の作物は悉皆流失し、人民一般挙て進退のなす処を不知、只忙然たり。依而其際は仮小家を設け焚出をなし、一時の窮を救ひたるも、本年は平年と異なり春作則ち麦作は凶作であり、加ふるに米価の騰貴より人民の困窮甚敷、常さへ困難なるに殆んど秋作を収穫すへき場合に至り、殊の外豊作に付農家の歎び一方ならざるに、豈凶らんや一時の洪水のため、野にあるものは悉く流失し家には最早収穫の場合とて一の蓄へもなく、自今は老若男女共、埋れたる青稻の穂を掘り出し、僅々一日巻、式升の粃を得て之を焚き米とし食料に宛て、壮なるものは山野に出て蕨の根を掘り取り食に宛つるなど露命を繋くばかりにして、此の窮迫なる状態、筆紙に尽難候得共現状に名状すへからず。至る処飢餓を訴ふるのみ。宜敷御詮議之上、戸籍写に照らし明治十三年以前生れは一日一人五合宛、同十四年以後同廿一年生れ迄は一日一人四合宛を以、至急御振恤相成度別紙食料、小家掛料仕訳書並に戸籍写及罹災者取調書相添へ此般具申仕候也。

明治廿三年九月廿六日

高岡郡上分村長 堅田良豊

高知県知事 調所廣丈殿

右の具申書が物語るように平水より7m余り高く、全地区濁流渦巻き、次に掲げる大損害を受けた。

溺死、圧死者 八名(男三、女五)

建築物の湛水 二七八戸

堤防、流失 七七ヶ所 破損一九ヶ所

道路、流失 一三九ヶ所、破損二五八ヶ所

橋梁、流失 一五

田 流亡 二〇反、荒蕪九五二反

畑 同 一〇反 同 一四八反

宅地 同 二反 同 一〇反

山崩 一二〇〇ヶ所

建築物損害

流失 压倒 大破 半壊 計

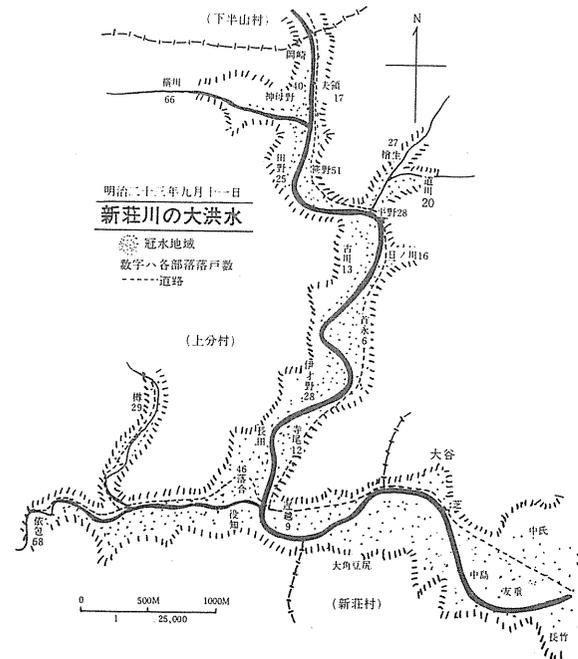
本家(居屋) 三三 二三 八 二七 九一

第2節 風水害

納屋	一二	九	一二	三三
雪隠	四二	一三	一	八
紙漉屋	五		四	六四
釜屋		四	四	九
板蔵		一	一	二
風呂場			一	二
既舎	一			
学校	一			
計	九八	五〇	九五七	二一四

新莊村の状況(新莊村誌による。)

明治廿三年九月十一日(旧暦七月廿七日)あたかも二百二十日の厄日であった。朝から細雨が降っていたが、午前十時頃から夜のように一天暗黒となり、沛然と雨は瀑水の如く約三時間後の午過ぎには、濁水は全村に溢れた。この洪水は所謂「山汐」で山を崩し谷を変えて川を埋め、家屋は圧潰ぶされ流され資産の多くを失ひ家族は離散するな



どその猛威は言語に絶する程であった。

落合渡瀬の東岸堤防上の二本の椋の大樹が官道を挟んで屹立していたが、堤防と共に流れて内一本は中氏の芝まで流された。水は加茂宮の馬場を横切り南岸大角豆尻を洗って田地の大半を埋め、餘勢は北に向って中氏を突き、芝堤防及び竹藪を流してその南に潮をつくった、深さ数尋、洪水は滔々として中島から友重へ、田地全部を浸して馬海山に激突して長竹堤防を毀ち、それ以東の堤及び竹藪を崩し、その北岸の九反地、堤防またその形を止めない有様であった。この状況であったので邸宅、田圃は瞬時に砂礫と化した。これに加へて坂ノ川其他溪流の勢も本流に譲らず、山谷から押出した土砂は堆積して丘山をつくり、南北の二つの山脈は堤防となり、中間の平野はすべて河身であった。その後水がひいてから落合の河岸に立って遠望すると、須崎の港湾は直視され一として目を遮るものなく如何に水勢を甚しかったかを知ることが出来る。

水害以前は大角豆尻、中氏、長竹共、平野に点々と人家があったが、今回の大洪水で流亡あるいは潰れたのでその後続々山手に移転し現在のように平坦部に住むものがなくなった。

- 死者総数、十四名(大角豆尻七、中氏三、長竹四)
- 家屋流失、十四軒(〃 四、中氏八、長竹二)
- 馬 流失、 六頭
- 其の他の損害不詳

(付)

吾桑村国見、松浦勝重氏蔵の記録によると、
 明治二十三年旧七月二十七日、吾桑村桜川大洪水のため、同家の屋敷は三尺余の水に洗われ石垣崩れ、家が流

失した。

明治二十五年七月二十三日の台風。七三〇ミリの台風で戸波村誌によると、「新莊川大洪水堤防欠潰」とあるが詳細については不明。

明治三十二年の台風

八月二十八日、七二〇ミリの強い台風で、高知城天守のシャチが吹き飛んだという。県下の被害は死者百余、全壊七千五百、新莊川筋も洪水に見舞れた。

九月二十一日、再度台風と豪雨による被害が続いた。この台風は二十日から九州西岸を北上したが、進行速度が遅く三日間にわたる大雨（須崎二〇〇mm、東津野七〇〇mm）で旧上分村役場所蔵の記録によると、田畑の損害はいうまでもなく、住家の全壊一七、納屋その他二五、半壊三〇に及び、堤防も寺尾で四〇間、日ノ川で七〇間決壊した。

当時の村長大野誓氏の、知事宛の具申書の一節に、「今回の大洪水は、去る廿三年の洪水と同様の被害にして浸水家屋数十軒、田畑の諸作物は一切流亡、家に衣食の貯へなく野に食物の求むべきものなし。中にも被害者中三十九戸は平素貧困なる上に浸水床上に及び、食料器具等を流失（下略）」とあるが、浸水家屋の詳細の調査によると。

床上八尺以上 四戸。 同五尺以上二戸。 同 三尺以上 一八戸。 同三尺以下 一五戸。

なお、浸水は九月二十一日午前十時から午後二時まで。

櫻川の洪水について、神田新川橋にある水害予防組合の記念碑の碑文に

「明治卅二年八月各地大洪水アリ。就中氾濫殊に甚シク川壅堤防形ヲ止メス。其他ノ破壊十ヲ以テ数フヘク

恰モ滄桑ノ感アリ、云々。」とあるように相当な被害があった。

山潮

集中豪雨で大水が出て急に大山崩れを起すことがある。山潮といって恐れられている。現在所々に防災処置がとられている。

何時の頃か桑田山に大山潮があっただらうか思われる痕跡がある。昔、押岡の人々が入植して開墾していたところ、突然大音響とともに、大山潮が吹き出し、字滝の前から見見るうちに山崩れがして、またたく間に人々を埋め盡したという。そのあとに桑田山部落が出来たものといわれている。

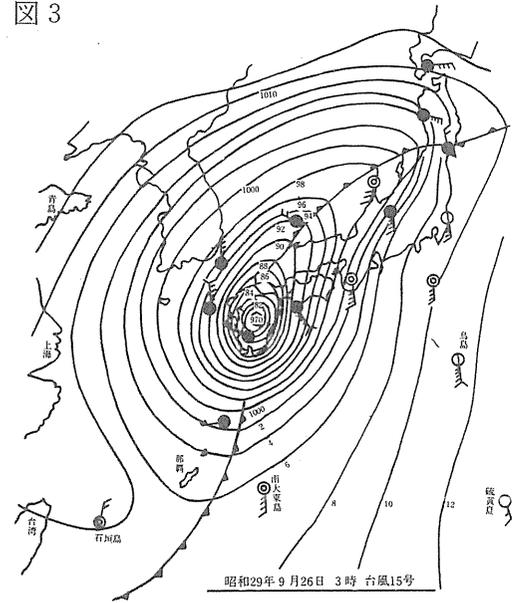
最近部落の人が土地を開拓していたところ、桑田山神社の後方から夥しい数の人骨が出てきたといい、また田に打った古い木の杭が出てきたという。

二、戦後の台風と豪雨

昭和二十九年九月二十六日、十五号台風（洞爺丸台風）二十六日二時大隅半島に上陸、非常に速い速度で北東進を続けた。函館で連絡船洞爺丸など、沈没するという大惨事を起した台風。

本県では、雨よりもむしろ風が強く、最も激しかったのは真夜中から七時頃までで、宿毛では最大瞬間風速五四・六mに達し、（中心示度九七〇ミリ）須崎付近でも、戦後最大の強風で、瓦が飛ぶやら塀が倒れるなど被害が酷く、須崎高校（鍛冶町）の増築校舎の北側の瓦が大半吹き飛んだ。県下では家の全半壊一六〇〇、浸

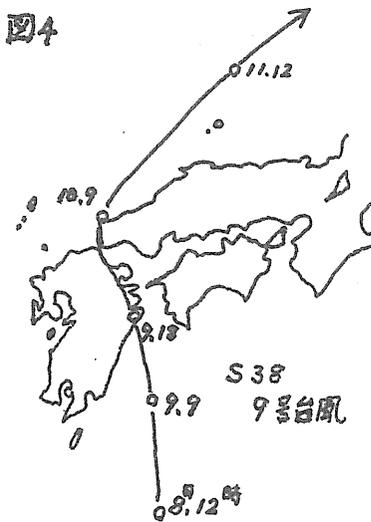
図3



水家屋は七七七五（うち床上浸水一二三五）の多きに達し、須崎は災害救助法適用される。

昭和三八年・九号台風 中心示度、九六五ミリパール、八月八・九日 中心の移動速度が遅く、暴風雨時間が長くて県下の中西部に豪雨をもたらす。（図4）
八・九両日の降雨量

図4



大野見 七〇〇ミリ
船戸 九八〇ミリ
須崎 四〇六〇〇ミリ

新莊川では、三十年来の大洪水、河口附近では数ヶ所堤防が決壊した。

罹災世帯 四四四 人員 一六二二人

家屋 全壊、一、半壊 一二、浸水、床上 一九二戸 床下 一三九戸

田畑流失冠水 四九二ヘクタール

橋流失、道路欠壊等、三七ヶ所

農林被害等

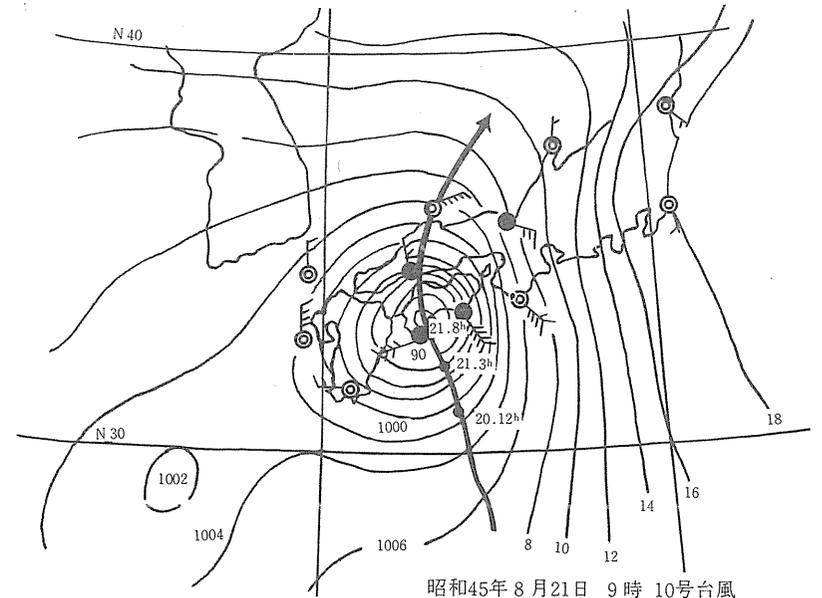
被害総額 二億二五〇〇万円、災害救助法発動

昭和三九年、二〇号台風。九月二四・二五日 中心示度、九三〇ミリパール

愛媛県西海岸に上陸し、県境を北東進、須崎附近では、二四日二時頃から風強く平均二二mに達し、降雨量は二〇〇mm内外、

須崎市 (県下中部地区被害)
全壊 二〇戸 (二四六戸)

図5



昭和45年8月21日 9時 10号台風

半壊 一六八戸 (一一五六戸)
 被害総額 四億七五〇〇万円(床上浸水 二四戸)
 災害救助法発動 (床下浸水八三三戸)

昭和四五年八月二日、一〇号台風

八月一日、マリアナ群島附近に発生、二〇日正午室戸岬南方五〇〇キロ附近に達し、風速二五m以上の暴風雨となり、中心は二一日八時頃、佐賀町附近に上陸して、今治から米子を経て日本海に抜けた。高知地方気象台開設以来最大といわれる大型台風で、県下全域にわたり甚大な被害をうけた。

この台風は、毎時三〇km〜四〇kmと加速しながら真直に接近通過したため、暴風雨時間は短かったが、勢力を維持したまま上陸して猛威をふるった。とくに四国のほとんどが、台風進行の危険半円にはいり、風が強く最大瞬間風速は第一級であった。須崎湾内で巡視船むろとの観測によると、

四時 八% 六時 一〇%

八時 一七% 一〇時 二五%

最大瞬間風速五四%

一二時 一五%最大瞬間風速二五%一四時一三%

雨は夏台風型の台風直接の雨でその強度が強かった。

約半日の間に二〜三〇〇mmに達した。

太平洋側の波浪は最大級で特に、高知や須崎地域では満潮時と重なって高潮による浸水の害がひどかった。

須崎市においては、家屋はもとより農林、水産物並びに漁港・漁業施設の被害が大きかった。次の被災統計が示すように、市内でも海岸地域は、先の南海大地震を大きく上回る惨害を受けた。

新莊長竹地区は穀倉地帯で、施設園芸は巨額の被害があり、新築家屋が倒壊した。

野見・大谷地区は、中小学校々舎の屋根が吹き飛ばされ校舎全体が大きく傾き、水産関係の被害も十一億円に達し、背後の樹林もなぎ倒された。

浦ノ内方面では、池ノ浦部落が大波のためにほとんど全滅し、湾内の各集落殊に、横浪・深浦・中ノ浦、



横浪附近の高汐

第2章 自然災害

第2節 風水害

地域別家屋被害

	全壊	半壊	床上浸水
池浦	7	13	3
須ノ浦		5	1
福良			2
今ヶ内		5	5
下中山	2		8
鳴無	1	4	3
坂内		14	
中ノ浦		13	7
大浦		5	
横浪	3	14	66
出見	3		2
深浦	1	29	3
塩間	1	5	8
灰方	3	8	
埋立	3	22	1
小計	24	137	109
神田	3		
赤崎		6	
大間			5
串ノ浦		5	
押岡	1		
久通		5	
大谷		6	1
駿岐	1	16	
野見		28	14
勢井		3	
河原		7	
小計			
上分			1
長竹	1	19	
安和	2	11	3
吾桑	1	28	
須崎	2	58	10
計	35	394	141

須崎市被害状況

	数 量	被害額(万円)
住宅	全壊 35世帯 135人	3150
	半壊 409世帯 1630人	2億400
	一部損壊 3550世帯 14300人	2億8400
非住宅	全壊 150戸	4200
	半壊 550戸	1億1000
学校 其他	全壊 2戸	1億1260
	半壊 140戸	2540
土木	県工事分	4675
	市工事分	2億8720
水産	施設 163	1億8590
	漁船 511	9210
	漁具ハマチ 真珠等 689	11億2464
農作物	稲 610 ha	1億1344
	果樹	8886
	特用作物	8100
	その他	4248
商工関係	工場 352ヶ所	1億7176
	商業 1248	1億9900
	罹災世帯 4480戸	被害額不明
合 計		37億3150



南小中学校の被害

埋立など高潮は軒先まで浸水したものが多く、深浦付近の真珠養殖関係も壊滅的な損害を受けた。須崎市の被害総額三十七億余円。県下二十六市町村と共に、災害救助法の発動をうけ、救助・清掃・防疫などに全力を尽すとともに、早期復興に努めた。被害の実態を次の表に示す。